

神戸市外国語大学 学術情報リポジトリ

日本語に接続法は存在するか？

メタデータ	言語: spa 出版者: 公開日: 2015-03-01 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 福嶋, 教隆, FUKUSHIMA, Noritaka メールアドレス: 所属:
URL	https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/1883

This work is licensed under a Creative Commons
Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0
International License.



日本語に接続法は存在するか？¹

福 嶋 教 隆

Abstract

Does the subjunctive mood exist in Japanese? We can find hints to the answer to this question in the Grammars that Iberian missionaries left in the 16-18th centuries. They took traditional Latin grammar as a model for describing the grammar of Japanese, and consequently, some verbal forms were identified as those of the subjunctive mood. Though their desire to identify this mood in Japanese was never realized, their studies on the verbal system offer significant insights into comprehending the syntax, semantics and morphology of Japanese verbs, which are ignored by modern linguistic surveys.

1. はじめに

我々は自分の母語による意思表示に親しむあまり、母語が持つ表現手段の全てが他の言語にも備わっているとは限らないことが、なかなか納得できない。たとえばロマンス系の言語を母語とする者にとっては、接続法に当たる動詞形態が存在しないのに、支障なく意志伝達を行なえる、日本語のような言語が存在することが極めて奇異に感じられる場合がある。

16～17世紀に来日したイベリア半島出身の宣教師たち²が遺した各種の日本語の文典と辞書は、古典ラテン語文法、及びそれに基づくロマンス語文法の記述法に準拠して編まれたため、日本語の動詞形態の中には接続法として扱われているものがある。

彼らは、日本語文法のどのような部分に、ラテン語、ロマンス語の接続法との親近性を見出したのだろうか。日本語と全く系統を異にする言語話者が数百

1 本稿は、スペイン語で発表した拙稿（2013）及び拙稿（2014）第3章（pp.49-66）を日本語に訳し、加筆修正したものである。

2 周知のことながら、時代背景を記しておく。ポルトガル人は1543年に日本に初めて来た。スペイン人宣教師フランシスコ・ザビエル（Francisco Xavier）は1549年来日した。イベリア半島と日本の交流は、1624年のスペイン船の来航禁止、1639年のポルトガル船の来航禁止まで続いた（ただし1580－1640年はスペイン王がポルトガル王を兼ねていた）。1860年の日葡和親条約・日葡修好通商条約および1868年の日西修好通商条約の締結により、両国との交流が再開された。

年前行なつた日本語記述を振り返ることによって、日本語とロマンス系の言語の叙法、モダリティに関する対照研究の新たな視野を探ってみよう。

2. ネブリハ (1492)

宣教師たちの日本語記述の方法を理解するために、まず彼らが準拠した当時のスペイン語（イスパニア語）文法として、史上初のスペイン語文法書であるアントニオ・デ・ネブリハ（Antonio de Nebrija）の『カスティーリャ語文法』に着目し、その叙法に関する論述を検討しよう。

- (1) El modo en el verbo, que Quintiliano llama calidad, es aquello por lo cual se distinguen ciertas maneras de significado en el verbo. Estos son cinco: indicativo, imperativo, optativo, subjuntivo, infinitivo. Indicativo modo es aquél por el cual demostramos lo que se haze, por que ‘indicare’ en el latín es demostrar; como diciendo *io amo a Dios*. Imperativo modo es aquél por el cual mandamos alguna cosa, por que imperar es mandar; como *¡o, Antonio! ama a Dios*. Optativo modo es aquél por el cual desseamos alguna cosa, por que ‘optare’ es desear; como *¡o, si amasses a Dios!* Subjuntivo modo es aquél por el cual juntamos un verbo con otro, por que, ‘subjungere’ es aiuntar; como diciendo *si tú amasses a Dios, Él te amaría*. Infinitivo modo es aquél que no tiene números ni personas, y a menester otro verbo para lo determinar, por que infinitivo es indeterminado, como diciendo *quiero amar a Dios*.（動詞における叙法、これをクウィンティリアヌスは特性と呼んでいるが、これは、動詞におけるいくつかの意味の有り様を区別するうえでの拠りどころとなるものをいう。これには五種類があり、直説法、命令法、希求法、接続法と不定法とである。直説法とは今行なわれていることを明示するための叙法で、ラテン語での *indicare* は「示す」を意味し、*io amo a Dios* 「私は神を愛する」というような場合に当たる。命令法とは、我々が何事かを命令するのに使う叙法で、*imperar* は「命令する」を意味し、*¡o, Antonio! ama a Dios* 「おお、アントニオよ、おまえ神を愛せよ」というような場合に当たる。希求法とは、我々が何事かを願望するために使う叙法で、*optare* は「願望する」を意味し、*¡o, si amasses a Dios!* 「願わくばおまえが神を愛さんことを」というような場合に当たる。接続法とは、一つの動詞をもう一つの動詞に結び付けるときに使う叙法で、*subjungere* は「(下に) 結び付ける」ことを意味し、*si tú amasses a Dios, Él te amaría* 「もしおまえが神を愛するのなら、神はおまえを愛されることであろうが」というような場合に当たる。不定法とは、数をも人称をもたない叙法で、こ

れを決めるためには他の動詞を必要とするが、*infinitivo* とは「不定の」の意味で、*quiero amar a Dios* 「私は神を愛したい」、というような場合に当たる。）(Nebrija 1492: III, 10. Galindo 他・編 1946 復刻版 : 77. Quilis 編 1996: 185. 中岡・訳 1996: 108-109)

このように、ネブリハはラテン語文法の伝統を15世紀のスペイン語記述にも適用して、希求法と接続法を区別するが、前者のすべての形態と同一の形態が後者にも認められる³。同書の第5巻に掲げられた活用形一覧の以下の箇所を見られたい。

(2) *Optativo* (希求法):

En el tiempo presente (現在時制において): *O si amasse, amasses, amasse, amássemos, amásseis, amassen.*

En el tiempo pasado (過去時制において): *O si amara, amaras, amara, (...)*

En el mesmo tiempo, por rodeo (同一時制において、複合形による): *O si oviera amado, ovieras amado, (...)*

En el mesmo tiempo, por rodeo, en otra manera (同一時制において、他の方法での複合形による): *O si oviesse amado, (...)*

En el tiempo venidero (未来時制において): *Oxálá ame, ames, ame, (...)*
(Nebrija, 1492: V, 4. Galindo 他・編 1946 復刻版 : 120-121. 1996: 240-241)
(括弧内の和訳は中岡・訳 1996: 177-179)

(3) *Subjunctivo* (接続法):

En el tiempo presente (現在時制において): *Como ame, ames, ame, amemos, améis, amen.*

En el pasado no acabado (未完結過去時制において): *Como amasse, (...)*

En el mesmo tiempo, por rodeo (同一時制において、複合形による): *Como amaría, (...)*

En el tiempo pasado, acabado, por rodeo (完結過去時制において、複合形による): *Como aia amado, (...)*

En el pasado más que acabado (大完結過去時制において): *Como amara, (...)*

3 中岡・訳 (1996: 213-214) は、その訳注において、次のように指摘している。「希求法未来 (*futuro del optativo*): ネブリハは現代イスパニア語文法でいう接続法現在にこのような名称を与えていた。ネブリハの立てたイスパニア語動詞の叙法体系によれば、希求法が接続法に先行して配置されるので、この順序に従って記述すれば、近・現代語文法の接続法現在は希求法未来、とならざるをえない。」

En el mismo tiempo, por rodeo (同一時制において、複合形による): *Como avría amado*, (…)

En el mismo tiempo, por rodeo, en otra manera (同一時制において、他の方法での複合形による): *Como oviera amado*, (...)

En el mismo tiempo, por rodeo, en otra manera (同一時制において、他の方法での複合形による): *Como oviesse amado*, (...)

En el tiempo venidero (未来時制において): *Como amare*, (...)

En el tiempo pasado, por rodeo (過去時制において、複合形による): *Como aia amado*, (...)

En el mismo tiempo, por rodeo, en otra manera (同一時制において、他の方法での複合形による): *Como avré amado*, (...)

En el mismo tiempo, por rodeo, en otra manera (同一時制において、他の方法での複合形による): *Como oviere amado*, (...) (Nebrija 1492: V, 4. Galindo 他・編 1946 復刻版: 120-123. Quilis 編 1996: 241-245. 括弧内の和訳は中岡・訳 1996: 179-183)

この一覧では、接続法の形態にはいずれも接続詞 **como** が冠されている。これはラテン語文法で接続法の前に **cum** を付ける表記法に従ったものである。ラテン語では **cum** は接続法を導く時間用法、原因用法、譲歩用法を持つが、スペイン語の **como** は、接続法の導入辞としての機能はそれほど顕著ではない。

- (4) a. Cum pater veniret, puella expalluit. (Como el padre viniera, la niña palideció. 父親が来たとき、少女は顔色を変えた。〈時間の cum + 接続法〉)
- b. Puella laeta est cum pater veniat. (La niña está contenta porque su padre viene. 少女は父親が来たので喜んでいる。〈原因の cum + 接続法〉)
- c. Cum sis fortis, tamen non vinceris. (Aunque seas valiente, sin embargo no vencerás. たとえ汝が勇敢であろうと、勝ちはないであろう。〈譲歩の cum + 接続法〉) (Almida 他 2013. 和訳は本稿筆者)

いわゆる南蛮人の宣教師たちは、この伝統を踏まえて、日本語に直説法、命令法の他に、希求法と接続法を認め、また、**como** の中でも特に時間用法の **como** を接続法と関連づけつつ、日本語を記述していくことになる。

3. ロドリゲス (1604-08)

宣教師たちが日本語文典を編む際に直接準拠したのは、エマヌエル・アルバ

レス (Emanuel Álvarez) のラテン文典であった。1572年の原典ではなく、1594年に天草のイエズス会が出版した縮約・補訂版が利用された (Rodriguez 1604-08 土井・訳 1955: 4, 土井 1933; 1982: 90-118, Cooper 1974. 松本・訳 1991: 207) が、いずれの版も、希求法、接続法を区別する点や、cum と接続法とを関連づける点では、ネブリハの前掲書と方針が全く一致している⁴。

当時、世に出た諸々の日本語文典の中で最も重要なのは、ポルトガル人宣教師ジョアン・ロドリゲス (João Rodriguez; Ioão Rodriguez) が1604-08年に著した *Arte da lingua de Iapam* (ロドリゲス日本大文典) であろう。ここには、5世紀前の日本語文法の諸相が正確に、かつ網羅的に記述されている。

ロドリゲスは、まず日本語に3つの叙法を設ける。

- (5) Esta lingua não tem propriamente mais que Indicatiuo, Imperatiuo, Conjunctiuo, & Participio, que tenham proprias vozes: por que os de mais modos se suprem desies com certas particulas que se lhe ajuntão, como se verá no discurso das conjugações. (この国語は、直説法、命令法、接続法及び分詞には固有の語形があるけれども、それ以外の法は元来ないのである。その外の法はこれらの法とそれに接続する特定の助辞とによって補はれるからである。その事は活用に使って述べて行く中に見られるであらう。) (Rodriguez 1604-08: 8. 島・編 1969 復刻版: 25. 土井・訳 1955: 33)

しかしその後の章では、この3つに含まれていない希求法について詳しく説明される。これは自己矛盾というわけではない。

- (6) Presente, & imperfecto do modo Optatiuo (希求法現在及び不完全過去):
Aguei caxi, Aguei gana. (上げいかし、又は、がな) *Agueyo caxi, Agueyo gana.* (上げよかし、又は、がな) *Aguesai caxi, Aguesai gana.* (上げさいかし、又は、がな) *Oxala offrecerasim, ou offrecesses* (提供すればなあ), (...)

4 小鹿原 (2010: 3-5) は以下のように述べている (本稿筆者による要約)。「天草版ラテン文典は、日本語への言及が原著に追加されている。ラテン語の動詞活用表に日本語訳とその解説が付いている。接続法には *vomoyeba* (思へば)、*vomouaba* (思はば)、*vomoyedomo* (思へども) という訳語が当てられている。また、これらに「時」「に」「ところ」のような語句が後続する形式も接続法と認めている。天草版の編著者たちは、日本語の接続法的表現を捉えるためには、ラテン語の接続法という狭い文法範疇を超える必要があることを認識していたのである。土井 (1933; 1982: 110) は、天草版ラテン文典とロドリゲス日本大文典は親子関係というよりも姉妹関係に立っていると指摘している。」

Preterito perfeito (完全過去):

Agueô monouo. (上げうものを) *Aguetaraba yocarô monouo.* (上げたればよからうものを) (...) *Oxala offrecesse eu.* (私が提供すればなあ) (...)

Preterito plusquam perfeito (大過去):

Agueô monouo. (上げうものを) *Aguete arô monouo.* (上げてあらうものを) *Aguete attaraba yorarô monouo.* (上げてあったればよからうものを) *Prouvera a Deos que offrecera eu, ou tivera offrecido* (私が提供していたらなあ). (...)

Futuro (未来):

Aguei caxi. (上げいかし) *Aguei gana.* (上げいがな) *Agueyo caxi.* (上げよかし) *Agueyo gana.* (上げよがな) *Aguesai caxi.* (上げさいかし) *Aguesai gana.* (上げさいがな) *Praza a Deos que offreça eu.* (...) (Rodriguez 1604-08: 14. 島・編 1969 復刻版: 38. 見出し和訳と和文表記は土井・訳 1955: 64. ポルトガル語訳の現代和訳は本稿筆者)

これらの形態は命令法と同一である。ロドリゲスは、日本語においては命令法に「かし、がな、ものを」のような願望を表す小詞が付くことによって希求法が作られると考える。つまりこの叙法は派生によって生まれた非本質的な叙法 (modo improprio) なので、基本となる 3 つの叙法とは区別されるわけである。

次にロドリゲスは日本語の接続法を論じる。

(7) Presente de modo Conjuntiuo (接続法の現在):

Agureba. (上ぐれば) *Aguruni.* (上ぐるに) *Aguru tocoroni.* (上ぐるところに) *Como eu offreço, ou offrecendo eu.* (私が提供して) (...)

Preterito imperfeito (不完全過去):

Agureba (上ぐれば), etc. *Aguetareba.* (上げたれば) *Aguetani* (上げたに), *Agueta tocoroni.* (上げたところに) *Como offrecis, ou offrecêdo eu.* (私が提供して) (...)

Preterito perfetito (完全過去):

Aguetareba. (上げたれば) *Aguetani.* (上げたに) *Agueta tocoroni.* (上げたところに) *Aguete areba.* (上げてあれば) *Aguete aruni.* (上げてあるに) *Aguetearu tocoroni.* (上げてあるところに) *Aguete.* (上げて) *Como eu offrecer, ou tenho offrecido, ou offrecendo eu, ou tendo offrecido* (私が提供していて)

Preterito plusquamperfeito (大過去):

Aguetareba (上げたれば), etc. *Aguete attareba.* (上げてあったれば) *Aguete*

attani. (上げてあったに) *Aguete atta tocoroni.* (上げてあったところに)
Aguete. (上げて) *Como eu offrecera, eu tinha offrecido ou offrecendo eu, ou tendo offrecido* (私が提供してしまっていて)

Futuro (未来):

Aguetarõ toqui. (上げたろう時) *Aguetarõzu toqui.* (上げたろうず時)
Agutarõzuru toqui. (上げたろうずる時) *Aguete arõ toqui.* (上げてあらう時)
Agueõ toqui. (上げう時) *Como eu tiuer offrecido* (私が提供するだろう時).
Agueõzuruni. (上げうずるに) *Agueõzuruniua* (上げうずるには). *Como eu offrecer* (私が提供して)

Aguete cara. (上げてから) *Aguete yori.* (上げてより) *Aguete nochi.* (上げて後)
Aguete igo. (上げて以後) *Como eu tiuer offrecido, ou depois que offrecer.*
 (私が提供した後) (...) (Rodriguez 1604-08: 15-16. 島・編 1969 復刻版: 40-41. 土井・訳 1955: 69-70. ポルトガル語訳の現代和訳は本稿筆者)

ロドリゲスは、接続法に、現在、完全過去、不完全過去、大過去、未来の5つの時制を認める。ラテン語文法の伝統に従い、ポルトガル語の「*como* + 接続法」との対応に留意した結果、時を表す語句を伴った形式を接続法の一つと見なしている。「に、とき、ところ」のような同時を表す語や、「から、より、のち、以後」のような後時を表す語、または「ば」のように時・条件を表す小詞を動詞に付随させた形式を接続法として扱う点が注目される。ロドリゲスが挙げる接続法の例文も、時に関するものである。

- (8) a. *Igon igomo coreyori mesanniuu cacuno gotoqu mairu bexi.* (自今以後もこれより召さんには此の如く参るべし。)(現代スペイン語: *De ahora en adelante vendré de esta manera cuando me convoquen.*)
 b. *Voquino catauo nagamuru vorifuxi, asafi saxivataru.* (沖の方を眺むる折節、朝日さし渡る。)(現代スペイン語: *Cuando veía el mar, salió el sol.*)
 c. *Miaco yori macari cudaru toqui, roxide cotono foca xinrõ ximaraxita.* (都より罷り下る時、路次で殊の外心劳しまらした。)(現代スペイン語: *Al venir de la capital, me molestaba la escasez de dinero más de lo que había creído.*)
 (Rodriguez 1604-08: 16. 島・編 1969 影印版: 41. 土井・訳 1955: 70. 現代スペイン語訳は本稿筆者⁵)

5 なお、ロドリゲスはこれらの例文にポルトガル語訳を付けていない。

ロドリゲスはラテン語の文法概念をそのまま日本語に適用するには困難があることを十分承知しており、この欠陥を補うべく、いくつかの附則を設けた。第1に、依頼、懇願を表す動詞とともに動詞の「て」形が用いられる場合は、これを接続法と見なすことにした。

- (9) *Alguns modos ha de falar pollo Coniuntiuo: o primeyro he por esta vez te, com alguns verbos de pedir, rogar, dar. Vt, cudasareru, cururu, tamõru, tanomu; he muy usado y elegante modo: a lingoahe he, Peço vos que me deys, Rogo vos que façays: y deste modo ja se fez menção no Imperatiuo. Vt, Caite cudasarei. Maitte tamõre, Xite curei*⁶. (接続法を用いた或言ひ方がある。その第一は、この「て」に終る形に、乞ふとか願ふとか与へるとかの意味を持った動詞のあるもの、例へば、「下さる」「呉る」「賜うる」「頼む」等を添へて用いたものであつて、多く使はれ、甚だ上品な言ひ方である。葡萄牙語では、*Peço vos que me deys*. (私に下さる事を貴方にお頼みします。)、*Rogo vos que façays*. (なさるやうに貴方にお願ひします。)) といふ言ひ方がそれに相当する。この言ひ方は既に命令法の条で述べた。例、「書いて下されい。」「参つてたまうれ。」「してくれい。」(Rodriguez 1604-08: 17. 島・編 1969 復刻版: 43. 土井・訳 1955: 73. ただし日本語の例語、例文のローマ字表記は省いて転記)

第2に、接続法の下位区分として「条件接続法」を新たに設けた。この叙法専用の形態が存在すること、使用頻度が高いことが、その根拠である。

- (10) *De modo conivuntivo condicional* (条件的接続法に就いて):
Ageba. (上げば) *Aguru naraba.* (上ぐるならば) *Aguruni voiteua.* (上ぐるに於いては) *Se eu offrecer* (もし私が提供すれば), etc. (...)
Parecera escusado acrecentar este modo nas conjugações, pois nem o latim, nem outra lingua o poem: toda via pareceome bem ajuntalo aqui na conjugação, pois tem particular voz y formação muy elegante, y usada, que nem o latim, nem a nossa lingua tem se não a supre com particulas. (この法は拉丁語その他の国語にないので、これを活用の中に加へるのは不必要と見えるだらうけれども、活用の中でここに置くのが良いと私には思はれるのである。何故か

6 これらの例文は、以下のように接続法を用いて現代スペイン語に訳することができる。*Caite cudasarei.* → *Le pido que me lo escriba.* *Maitte tamõre.* → *Le ruego que me espere.* *Xite curei.* → *Te suplico que lo hagas.*

といふに、特別な語形なり構造なり用法なりを持って居り、その構造は甚だ上品なものであつて、さういふ言ひ方は拉丁語でも我々の国語でも助辞を以て言に換へるのでなければ見られないものである。) (Rodriguez 1604-08: 18-19. 島・編 1969 復刻版 : 46-47. 土井・訳 1955: 80-81. ポルトガル語の和訳は本稿筆者)

日本語記述の先駆者ロドリゲスは、ラテン語文法に基づいて動詞の形態統語論的記述を行なおうとした。その結果、「接続法」という名称は、時を表す副詞節に使われる動詞形態にしか適用できなくなったが、附則を設けることで、願望用法と条件用法の動詞形態も接続法に準じて扱えるように工夫した。彼の提案は科学的であると同時に、天草版ラテン文典と同様の現実への柔軟な対応が認められる⁷。

4. ロドリゲス (1620)

ロドリゲスは、その後、大文典を要約・修正した『日本小文典』をマニラで出版した。同書では、日本語の叙法は分詞の他に、直説法、命令法、接続法、条件法の4つであるとしている。

- (11) Os modos dos verbos, que nesta lingua tem proprias vozes dos tempos, sam o indicatiuo; imperatiuo, coniunctiuo, condicional, & participio praeterito; os de mais modos suprem com as vozes destes, ajūtando lhes certas particulas. (直説法、命令法、接続法、条件法、過去分詞にあつてはそれぞれ固有の語形によって時制を表わすが、その他の法では、右の語形にある種の小辞を添えてその欠を補う。) (Rodriguez 1620: 18a. 福島・編 1989 復刻版 : 43. 池上・訳 1993: 上 99⁸)

7 なお、杉本 (1989: 48-49) はロドリゲスの提唱する日本語の動詞体系を次の3類に集約している。A「肯定・否定と人称動詞・非人称動詞の組み合わせ」、B「単純動詞と複合動詞」、C「能動・受動・中性(「中動」に当たる。本稿筆者注)と人称動詞・非人称動詞の組み合わせ」。品詞分類という観点による集約とは言え、ここには原著者が紙幅を費やして記述した叙法体系への言及が一切見当たらないことが注目される。国語学にあつては、叙法が日本語には無縁の範疇であると見なされる場合があることの現れと言えるかもしれない。

8 Landresse (1825: 12) による縮約版フランス語訳では、この部分は以下のように訳されている。“Les seuls modes qui aient des mots qui leur soient propres, sont l’indicatif, l’impératif, le conjonctif, le conditionnel et le participe passé; on remplace les autres en joignant à ces mots certaines particules”。

接続法には、時・条件を表す語形と譲歩を表す語形の2種を認める。

- (12) O modo conjunctiuo he de duas sortes com proprias vozes; o primeiro he o comum, & ordinario termiado em, *Eba*, que responde ao Latino, *cum*; outro terminado em, *Domo*, que responde à particula, *posto que*; os de mais modos não tem vozes proprias, mas explicam se por circumloquios, como ali se vera. (接続法には二種あり、いずれにも固有の語形がある。一つはラテン語の「……ので」の意の] *cum* に対応する *Eba* で終る一般的・通例的な接続法で、もう一つは「ポルトガル語の「……であるが」の意の] *posto que* に相当する *Domo* で終る接続法である。他の法はいずれも固有の語形を持たず、後に見るように、迂言語法によって表わす。) (Rodriguez 1620: 21a. 福島・編 1989 復刻版: 49. 池上・訳 1993: 上110)

第1種、即ち時・条件用法の実例としては、*motomureba* (求むれば)、*motometareba* (求めたれば)、*motometarözureba* (求めうずれば) が挙げられている⁹。第2種、すなわち譲歩用法の実例としては *motomuredomo* (求むれども)、*motometaredomo* (求めたれども)、*motomeözuredomo* (求めうずれども) が挙げられている¹⁰ (Rodriguez 1620: 49. 福島・編 1989 復刻版: 49-50. 和文表記は池上・訳 1993: 上110-111)。

また、大文典で「条件接続法」として接続法の下位区分とされた形態は、小文典では「条件法」という独立した叙法となった。*motomeba* (求めば)、*motomuru naraba* (求むるならば)、*motomuruni voiteua* (求むるにおいては) などの形態がこれに当たる。

このように、ロドリゲスは小文典では、大文典の記述を整理し、その柔軟な姿勢を一層進め、日本語の現実に対応するため、ラテン語文法には存在しない新たな叙法を設けるに至ったのである¹¹。

9 現代スペイン語の *como pida*, *como pidiese*, *como hubiera pedido* に対応する。

10 現代スペイン語の *aunque pida*, *aunque pidiese*, *aunque haya de pedir* に対応する。

11 厳密には、大文典の第2巻から「条件接続法」ではなく「条件法」という術語が用いられている(土井 1956; 1982: 151)。小鹿原(2010)は、この叙法の新設を「規範であったラテン文法からの大胆な変更」(p.11)だと述べ、その理由を「宣教のための実用文法書では、規範文法(ラテン文法)をモデルにするものの、著者の創意の余地が大きかった」(p.14)ことに求めている。なお、ロドリゲスの条件法は、帰結節ではなく条件節に用いられる動詞形態であるから、*Real Academia Española* (1973: 472-475) などが設ける *modo condicional* (条件法) (*amaría, habría amado*) と混同してはならない。

5. コリヤード (1632)

ロドリゲスの2つの文典と並ぶ重要な日本語の文法書が、1632年にスペイン人ドミニコ会士ディエゴ・コリヤード (Diego Collado; Didaco Collado) によって編まれた。*Ars grammaticae Iapociae Lingvae* (コリヤード日本語文典) と題するラテン語で書かれた書物で、分量はロドリゲス大文典の7分の1ほどである¹²。同書の中でコリヤードは、動詞の諸形態の機能について、次のように簡潔に述べている。

- (13) Verba in lingua Iaponica neque habent numeros, neque personas; faciunt tamen has differentias particulæ suprapositæ ad pluralia & declinationes. Coniugationes sunt tres affirmatiuæ, & totidem negatiuæ. (日本語の動詞には数も人称もない。而して此等の差異は、複数及び格を示す語尾変化に相当する助辞によつて表はされる。活用はたゞ三つの肯定と同数の否定とだけである。)
(Collado 1632: 18. 大塚・訳 1934: 25)¹³

コリヤードは日本語の動詞は数・人称の標識を欠くとしつつも、叙法の存在は認め、動詞には *indicatium* (直説法)、*imperatium* (命令法)、*optatium* (希求法)、*subiunctium* (接続法)、*permissium subiunctui* (譲歩接続法)、*conditionalem* (条件法)、*potentialia* (可能法)、*infinitium* (不定法)、*gerundium* (動詞状名詞)、*supinum* (目的分詞)、*participium* (分詞) のような形態があるとする (和訳は大塚・訳 1934: 25-52)¹⁴。コリヤード自身は動詞形態を一覧の形でまとめていないので、代用として Spear 訳 (1975) に付された一覧表から、希求法、接続法、譲歩接続法、条件法の肯定形の部分を以下に引用する。

12 コリヤード日本語文典と内容が大きく重複するスペイン語稿本 *Arte de lengua Japona por las ocho partes de la oracion* (八品詞による日本語文典) が存在する。筆跡はコリヤードのものではない。書写年代、書写者、原著者は不明である。従来、コリヤード日本語文典は、これに基づいて編まれたと考えられてきたが、小鹿原 (2009) は、スペイン語稿本のほうがむしろ誤りが少なく、文法書として整っていることから、この定説に疑義を表明している。

13 コリヤード日本語文典には Spear による英訳がある。参考までにここに掲げておく。"These distinctions are indicated instead by the particles used in the formation of the plurals and in the declension. There are three affirmative conjugations and the same number of negative." (Collado 1632, Spear 訳 1975: 123)

14 大塚・訳 (1934) は「条件法」「可能法」という訳語を用いているが、Spear 訳 (1975) はこれらを各々 The Conditional, The Poteintial とのみ呼んで、Optative mood, Subjunctive mood, Permissive subjunctive mood とは一線を画している。

(14) a. Optative mood (希求法) :

Present (現在) : *avare ague io caxi* (あはれ上げよよかし). Preterit (過去) : *agueôzu mono vo* (上げようずものを). Future (未来) : *avare ague io caxi* (あはれ上げよかし)

b. Subjunctive mood (接続法) :

Present (現在) : *agureba* (上ぐれば). Perfect (定過去) : *agueta reba* (上げたれば). Pluperfect (大過去) : *aguite atta reba* (上げてあったれば). Future (未来) : *agueô toqi* (上げよう時)

c. Permissive subjunctive mood (譲歩接続法) :

Present (現在) : *agueredomo* (上ぐれども). Preterit (過去) : *agueta redomo* (上げたれども). Future (未来) : *agueôzu redomo* (上げようずれども)

d. The Conditional (条件法) :

Present (現在) : *agueba* (上げば). Preterit (過去) : *agueta raba* (上げたらば). Future (未来) : *agueô naraba* (上げようならば). (Collado 1632. Spear 訳 1975: 9-10. 術語和訳は大塚・訳 1934. 和文表記は本稿筆者)¹⁵

コリヤードは、このように日本語の接続法には現在、定過去、大過去、未来の時制を認める。以下に接続法について述べる部分を記す。

(15) Subiunctivum primæ coniugationis affirmatiuæ:

Præsens subiunctivi fit ex præsentis indicatiui mutato, *u*, in quo finitur in *ēba*, v. g. ex, *āguru*, fit *āgurēba* “cum offerem”: fit etiam ex præsentis addita particula, *tocoro*, super addita *ni*, *de*, *uo*, vel, *ua*, secundum exigentiam declinationis verbi quod sequitur; primum enim subito munus nominis: v.g. *arutoqi Pedro chinsui xitè iraruru tocoro ie fitō gaqite*, “cum venisset quidā homo ad locum vbi erat Petrus quando erat ebrius”, *nhōbō ni tachi vacarète iru tocōro ni*, “cum essent diuisi, & diuortium fecissent coniugati”, *có aru tòcorō de*, “cum hæc ita sint”, *iòso ie zzuru tocòrouà fito ni corosarèta*, “occisus est a quodam homine cum exiret foras”, *go misa vo asobasarùru tocòro vo uchi coroita*, “occidit illū cum actualiter missam celebraret”, & est regula generalis in omni coniugatione.

15 ここではローマ字表記は Spear 訳 (1975) に従う。例えば原典では譲歩接続法現在 *āgurēdōmō* と記されているが、Spear はこれを単純化して *agueredomo* としている。本稿では、この引用以外は原典の表記に従っている。

Præteritum perfectum & plusquam perfectum subiunctiui fit ex præterito perfecto indicatiui postposita particula, *rēba*, v.g. *āguēta rēba*, “cum obtulisset”: fit etiam ablato verbo *gozaru*, à præterito plusquam perfecto; & posito loco eius, *attarēba*, vel *atta*, quando vero ponitur, *atta*, debet superaddi vel, *ni*, aut, *uo*, *ua*, vel, *ie*, secundum quòd petit subsequens verbum; ad modum supra positum de præsentis subiunctiui cum particula, *tocòro*, v.g. *āguēte atta rēba*, vel *āguete atta*, *ni*, *uo*, *ua*, vel, *ie*, “cum iam obtulisset”.

Futurum subiunctiui fit addendo futuro indicatiui particulā, *tòqi*, v.g. *āgueò tòqi*, “cum postea offerat”.

Præteritum plusquam perfectum subiunctiui, vel quomodocumque illud voces, denique ad significandum hoc quod est, postquam fecissem actionem verbi, fit postpositis particulis, *cara*, *nòchi*, vel *īgo*: præterito plusquam perfecto; ablato tamen verbo, *gozaru*, v.g. *aguēte cara*, *nochi*, vel, *igo*, *mairó*, “postquam obtulerit proficiscar”: idem quasi est, *aguētarō toqi mairó*, “proficiscar quando iam obtulerit”, *āgueōzurū ni*, vel, *āgueozuru tocoroni*, significat, “cum iam esset paratus ad offerendum”: vel “vt offerret”, *āgueōzuru còto no saqini*, significat “paululum antequam offeret”. (肯定第一活用 of 接続法に就いて／接続法の現在形は直説法の現在形から、語尾の *u* を変へて「エ〜バ」とする。例へば、「ア〜グル」から「ア〜グレ〜バ」(私が捧げるから〔時〕)。これは又助辞「トコロ」を附加へ、その上に、後続く語に応じて「ニ」、「デ」、「ヲ」、或ひは「ワ」を附加へて、現在形から作られる。例へば「アルトキペドロ チンスイ シテ イラルゝ トコロ エ ヒト〜 ガキテ」(ペトルスが酩酊して居られたところへ或る人が来たので(時に))、「ニヨ〜ボー ニタチ ワカレテ イル トロコ ニ」(彼等が別れて離婚してゐる時に)、「コーアル トコロ〜 デ」(斯くある時に)、「ヨソ エ ズル トコロワ ヒト ニコロサレタ」(彼は戸外へ出たとき人に殺された)、「ゴ ミサ ヲ アソバサルゝ トコロ ヲ ウチ コロイタ」(その人が弥撒の礼を行つてゐる時に彼は殺した)。而してこれは総ての活用に通ずる規則である。／接続法の定過去及び大過去は直説法の定過去に「レ〜バ」を附して作る。例へば「ア〜ゲタ レ〜バ」(彼が捧げたから〔時〕)。又大過去から動詞「ゴザル」を取り去り、その代りに「アツタ レ〜バ」或いは「アツタ」を置くことによつても作られる。但し「アツタ」が置かれるときには後続く動詞に応じて「ニ」か「ヲ」、「ワ」或ひは「エ」を附加へなければならぬ。この場合には「トコロ」を伴ふ接続法の現在形に関する前述の方法に従ふのである。例へば「ア〜ゲテ アツタ レ〜バ」、或ひは「ア〜ゲテ アツタ、ニ、

ヲ、ワ」、或ひは「エ」(既に彼が捧げてみた故に)のやうに。／接続法の、未来形は直説法の未来形に助辞「トキ」を附加へることによつて作られる、例へば「ア〜ゲヨウ トキ」(あげるだらうとき)のやうに。／接続法の大過去、或ひは、如何なる名称と呼ばれようとも、要するに動詞の動作を為した後にあることを表はさんとするときには助辞「カラ」、「ノチ」或ひは「イ〜ゴ」を大過去の後に置く。但し動詞「ゴザル」は取り去られる。例へば「アゲテ カラ、ノチ」、或ひは「イ〜ゴ マイロー」(私は捧げた後に、行く)。これは、「アゲタロー トキ マイロー」(私は既に捧げてしまつてから行く)とあるのと同一である。「ア〜ゲヨウ ズルニ」或ひは「ア〜ゲヨズル トコロニ」は「捧げるために、或ひは捧げることが出来るやうになつたときに」の意。「ア〜ゲヨウズル コト ノ サキニ」は「捧げる少し前に」の意である。(Collado 1632: 22-23. 大塚・訳 1934: 30-32. ただし日本語の例語、例文のローマ字表記は省いて転記)¹⁶

以上のようにコリャードは接続法の諸時制の形態について詳しく扱っているが、そこに示された事例は、ラテン語の「cum + 接続法」及びスペイン語の「cuando + 直説法」に対応する時間表現に限られ、統語論的には情報量に乏しいと言わざるを得ない。

16 Spear の英訳では、この項は次のようになる。“The Subjunctive of the First Affirmative Conjugation. / The present tense of the subjunctive is formed by changing the *u* in which the present indicative ends to *eba*; e.g., *aguru* becomes *agureba* ‘since I offer.’ It is also formed from the present by adding *ni*, *de*, *vo*, or *va* to the particle *tocoro* according to the case requirements of the verb that follows, with the first verb being controlled by the noun; e.g., *aru toqi Pedro chinsui xite iraruru tocoro ie fito ga qite* ‘since a certain man came to the place where Peter was when he was drunk,’ *nhóbó ni tachi vacarete iru tocoro ni* ‘since they were separated and divorced,’ *có aru tocoro ni* ‘since things are this way,’ *ioso ie zzuru tocoro va fito ni corosareta* ‘when he went outside, he was killed by someone,’ *go misa vo asobasaruru tocoro vo uchi coroita* ‘he killed him while he was celebrating mass.’ This is a general rule which applies to all conjugations. / The perfect and the pluperfect or the subjunctive are formed from these same tenses in the indicative with the addition of the particle *reba*; e.g., *agueta reba* ‘since he had offered.’ It is also formed by taking away *gozaru* from the preterit pluperfect and putting in its place *atta reba* or *atta*; but, when *atta* is used, the particles *ni*, *vo*, *va*, or *ie* must be added according to the requirements of the following verb, just as with *tocoro* in the present tenses; e.g., *aguete attareba* or *aguete atta ni*, *vo*, *va*, or *ie* ‘since I had already offered it.’ / The future of the subjunctive is formed by adding the particle *toqi* to the future indicative; e.g., *agueô toqi* ‘since he would offer it later.’ / The pluperfect subjunctive, with all the the expressions (*vox*) which signify that which comes after a completed action, is formed by (23 placing *cara*, *nochi*, or *igo* after the pluperfect indicative, minus *gozaru*; e.g., *aguete cara*, *nochi*, or *igo*, *mairó* ‘I shall leave after he has offered it.’ This is like *aguetaró toki mairó* ‘I shall leave after he has already offered it.’ *Agueôzuru ni* or *agueôzuru tocoro ni* means ‘since he was already prepared to offer it.’ *Agueôzuru coto no saqi ni* means ‘a little while before he offered it.’ (Collado 1632. Spear 訳 1975: 127-128)

コリヤードはロドリゲスと同様、希求法と接続法の他に条件法の存在を認めて日本語の現実に即した記述を行ない、さらには「譲歩接続法」も設けた。この叙法には以下の時制がある。現在形：*âgurêdômô*（上ぐれども。ラテン語 *etiam si offerat*. 現代スペイン語 *aunque ofrezca*）、過去形：*âguetarêdomo*（上げたれども。ラテン語 *quamuis obtulisset*. 現代スペイン語 *aunque ofreciese*）、未来形：*âgueôzurêdomo*（上げようずれども。ラテン語 *quamuis offerat*. 現代スペイン語 *aunque haya de ofrecer*）（Collado 1632: 23-24. 例語和文表記とスペイン語訳は本稿筆者）。この叙法はロドリゲス小文典の接続法第2種（譲歩用法）に相当する。

ロドリゲス大文典の記述に冗長な点があるのに比べ、コリヤード日本文典の記述は簡潔で明快である。しかし日本語の動詞の統語論に関しては、新たな貢献に乏しい。これは鎖国政策が厳しさを増し、本書の完成の10年前の1622年に筆者は日本を去らねばならず、十分な日本語観察ができなかったという事情も関与しているであろう¹⁷。

6. フアン・デ・ヘスス（16・17世紀）

その後、スペイン人フランシスコ会士フアン・デ・ヘスス（Juan de Jesús）が *Arte de la lengua japona*（日本文典）を書いた。これは、コリヤード日本文典をスペイン語に訳し若干の説明を加えたもので、草稿の状態にとどまり、刊行には至っていない。フアン・デ・ヘススの時代には日本は完全な鎖国体制に入っていたため、彼はマニラの地で日本語を学び、日本に布教する機会を空しく待ったのである。草稿には日付が記されていないが、野間（1965: 7）によれば、次節で見るオヤングレンの *Arte de la lengua japona*（日本文典、1738）以前に書かれたことは確かなので、少なくとも1632年から1738年の間に成立したものと言える。

フアン・デ・ヘススはコリヤードの日本文典に例語を追加し、例語、例文のスペイン語訳を補った。しかしコリヤードの立てた動詞体系を踏襲したので、接続法の記述に関しては特に進展があったとは言えない。

7. オヤングレン（1738）

18世紀に入って、スペイン人フランシスコ会士メルチョル・オヤングレン・デ・サンタ・イネス（Melchor Oyanguren de Santa Inés）が日本語文法書を著し

17 ロドリゲスの掲げる例文の多くは日本の文学作品から採ったものであるが、コリヤードの例文はミサで語るキリスト教説話の日本語訳を利用している。堀田（1996）、小鹿原（2009）、Cid（2011）、清水（2013）を参照。

た。同会の先輩フアン・デ・ヘススと同様、オヤングレンは来日することなく、コリヤード日本文典に拠ってフィリピンで日本語を学んだ。スペインへの帰路、メキシコにとどまり、ここで1738年に先述の日本文典を上梓した。バスク地方の出身であるオヤングレンは、しばしば日本語をバスク語と比べて論じる。彼はスペイン語とは全く系統を異にするバスク語の母語話者でもあったため、他の宣教師ほど日本語の諸特性を奇異には感じなかったようである¹⁸。日本語母語話者に接する機会が得られなかったため、その文典には日本語の表記などの誤りが多いが、コリヤードの文典の説明を体系化し、改良した点は、大いに評価できる。

オヤングレンは、不定法 (*modo infinitivo*) の他に以下の叙法を日本語に認める。直説法 (*indicativo*)、接続法 (*subjuntivo*)、命令法 (*imperativo*)、希求法 (*optativo*)、譲歩法 (*permisivo*)、原因・可能法 (*causal-potencial*)、条件法 (*condicional*)¹⁹。接続法は次のように説明されている。

(16) §.IX. Formación del modo Subjuntivo

De dos maneras suelen formar el presente de subjuntivo: la primera convirtiendo la *U* final del presente de indicativo en *eba*: como de *aguru*; *agureba*, ‘como ofrezca’; vel ‘ofreciese’, la segunda manera es poniendo el mismo presente de indicativo enteramente, y añadiendo *tocoro*, y tras esta voz, añadir alguna de las partículas de los casos, que se dixerón en el Libro primero: es â saber, *va*, *no*, *ni*, *vo*, *ye*; segun lo pidiere el regimen del verbo: y este tiempo de presente sirve para los preteritos imperfectos: ut, *nhoboni tachi vacarete iru tocoreni* [sic]²⁰; ‘como los casados estuviessen apartados’.

18 従来、「オヤングレンの文法書はロドリゲスやコリヤードのそれに劣る」と言われたことがあったが、松岡 (1982) は、日本の古典文学から多数の例文を引用している点などを指摘し、反論を試みている。岡本 (2011) は、オヤングレンがバスク語、タガログ語、中国語と対照しつつ日本語を記述したことから、その文典は「対照文法の先駆的」な書物であるとしている。Sánchez Jiménez (2012) も同じ点に着目し、オヤングレンを “un lingüista excepcional” (類を見ない言語学者) と評している。なお、同書は Humboldt (1826, 1852) に影響を与え、西洋における日本・日本語研究の契機となったことでも知られている。

19 なお、*causal-potencial* の *causal* は *casual* の誤記かもしれない。なぜならこの術語が指す語形は、*agururo* (上ぐるろう “*acaso ofrece*”)、*ageteoro* (上げておろう “*quizá ofreció*”)、*agueó cotomo arozu* (上げようことのあろうず “*quizá ofrecerá*”) など、*causal* (原因の) の意味ではなく蓋然性、可能性、即ち *casual* (偶発的な) の意味に当たるからである。オヤングレンは別の箇所では同じ形態を指して *modo casual*, *ò potencial* と呼び、揺れが認められる (Oyanguren 1738: 87-88, 108. Zwartjes 編 2009: 119, 134)。この問題は本稿の議論には直接関与しないので立ち入らず、岡本 (2012a) に従って *casual* (原因) と表記しておく。

20 *tocoreni* は *tocoroni* の誤記。

Pero se advierta, que *toacorode* significa ‘por tanto’, ó ‘por quanto’, ó ‘por esso’, ó ‘siendo assi’, y es como particula causal; ut, *co aru toacorode*, ‘siendo assi de esta manera’; ó ‘por quanto assi es’, &c. Y la particula *toacoroní* es como particula de dativo, junta con verbos; ut, *marirózuru toacoroní*; ‘aviendo de ir’; ó ‘estando para ir’; y de esta suerte se hacen, y componen las oraciones de ‘estando para’, y ‘aviendo de’; que los gramaticos latinos estudian en las platiquillas de oraciones.

Para formar el preterito perfecto, añaden al preterito perfecto de indicativo esta voz *reba*: ut, *aguetareba*: ‘como aya ofrecido’: otros le forman, quitando el como afixo de *gozaru*: *gozatta*: y en su lugar añadir *atareba*: como *aguete atareba* [sic]²¹: El tercer modo de formarlo es, poner en lugar de *atareba*: *ATTA* con alguna de las particulas causales, de las cuales se tratará despues: ut, *aguette* [sic] *attani*, vel, *vo*, &c. y las mesma formulaciones tiene el preterito plusquam perfecto.

Para formar el futuro tanto, ó de subjuntivo, suelen añadir al futuro de indicativo esta voz *toqi*; la qual â mas de otras significaciones, significa ‘quando’, y assi queda formado este tiempo: ut, *agueô toqi*: vel, *agueôxu toqi*; vel, *agueôzuru toqi*; ‘quando ofreciesse’, ó ‘huviesse ofrecido’, &c.

Aqui se reducen otros modos que ay, como condicional. causal, &c. y de consiguiente las oraciones, que llaman condicionales, ó causales, las cuales no tienen en la lengua Japona especial dificultad, supuesta la formacion de los modos comunes optativo, y subjuntivo: solo se añaden algunas particulas de causalidad para las causales; y particulas condicionales para las condicionales, y de todas se pondran exemplos de sus mesmos Escritores, por mas seguros para la practica; y por lo que huviere mudado el dialecto Japòn en mas de un Siglo, que ha, que cerraron el Japòn, y echaron de alli assi â Españoles como â Portuguses.

(9. 接続法の作り方／通常、接続法現在の作り方には二通りある。第一の方法は直説法現在の語末の「う」を「えば」に変えるもので、「上ぐる」から「上ぐれば」にすると como ofrezca (提供すれば) の意味になる。第二の方法は直説法現在をそのままの形にして、「ところ」を追加し、この語の後に第1巻で述べた格助詞、すなわち動詞の支配関係が要求するものに従って「は」、「の」、「に」、「を」、「へ」のいずれかを追加する。この現在時制は不完了過去としても機能する。例、「女房に立ち分かれて〔マ

21 *atareba* は *attareba* の誤記であろう。

マ] いるところに」。／しかし、「ところで」は[カスティーリャ語の] *por lo tanto, por quanto, por esso, siendo assi* (それゆえに) を意味し、原因の小辞と同じであることに注意されたい。例、「こうあるところで」。小辞「ところに」が与格の小辞と同じで、「参ろうずるところに」のように動詞と組み合わせる。こうして、ラテン文法家が会話文の中でよく例を挙げている *estando para* (～しようとしているところの) や *aviendo de* (～すべきところの) の構文を構成する。／完了過去を作るには直説法完了過去に「れば」という語を追加する。例えば、「上げたれば」は *como aya ofrecido* (提供したものであれば) の意味になる。他に、「ござる、ござった」の接辞のようなものを取り除き、代わりに「あたれば」を追加する。「上げてあたれば」。第三の作り方は、「あたれば」の代わりに原因の小辞の意味をもった「あった」を付けるというものである。この小辞については後ほど扱う。例、「上げてあったに／を」。なお、過去完了も同じ作り方である。／未来形を作るには直説法未来に「とき」という語を追加する。この語は他に[カスティーリャ語の] *quando* (～するとき) をも意味する。この時制は、「上げうとき」、「上げうずとき」、「上げうずるとき」の要領で形成され、それぞれ[カスティーリャ語の] *quando ofreciesse* (仮に提供するとき)、*quando huviesse ofrecido* (仮に提供したとき) を表す。／ここでは、他に条件や原因などの表し方を挙げるに留めておく。とはいえ、希求法や接続法の作り方を思えば、条件文や原因文と呼ばれる文は日本語でとりたてて難しいものではない。原因文には原因性を表す小辞を、条件文には条件を表す小辞を追加するだけである。実践のために最も確かな例として、全例について同じ文献の例を挙げておこう。(日本が鎖国し、イスパニア人やポルトガル人を追い出してから1世紀以上も経た今、日本語は変わってしまったかもしれないからである。) (Oyanguren 1738: 66-67. Zwartjes 編 2009: 103-104. 岡本・訳 2012a: 296. ただし日本語の例語、例文のローマ字表記は省いて、または和文表記に改めて転記)

オヤングレンは日本語の実情に即した記述を求めて、ラテン文法にはない叙法を設けた。その結果、接続法の機能は、時を表す用法、即ちラテン語の *cum* と共起する用法に限定されることになった。オヤングレンの文法は、コリヤードよりも現実主義的で革新的と言えるかもしれない。

8. ゴンサレス (1954)

オヤングレンをもってイベリア半島出身の宣教師による日本語文法書の時代

は終わり、19世紀以降はオランダ、ドイツ、イギリス、アメリカの研究者による日本語研究が進んだ。主な文法書としては、Curtius (1857)、Hoffman (1868)、Charberlain (1888)、また時代を下れば Alfonso (1966, 1980) などが挙げられる²²。概してこれらの著者は、接続法という概念を使わない。日本語の動詞体系は、現在・過去・未来時制、命令形、条件形、不定詞などの術語で記述される。著者たちの母語であるゲルマン系の言語では、ロマンス系言語ほど接続法が重要な位置を占めていないことがその要因であろう。日本の文法学者はこの流れを継承したため、国語学では叙法の概念を用いないのが通例であった²³。

しかし1954年にスペイン人ドミニコ会士ビセンテ・ゴンサレス (Vicente González) が *Gramática de la lengua japonesa* (日本語文法) を刊行した。そこには *Los tiempos del subjuntivo* (接続法の諸時制) という、以下に記す項目が立てられ、いわゆる南蛮人宣教師による日本語記述の系譜の存続が認められる。

(17) Los tiempos del subjuntivo

Los tiempos del SUBJUNTIVO son solamente dos en japonés: el Presente y el Pretérito condicionales.

Hablando en general, el Presente Condicional (...*aba*, ...*eba*) se refiere al Pretérito imperfecto y Futuro de Subjuntivo de nuestra Conjugación española, mientras que el Pretérito Condicional (...*ara*, ...*ta naraba*), suele referirse al Pretérito Perfecto y Pluscuamperfecto de Subjuntivo, cuando van acompañados de una partícula condicional. (接続法の諸時制／日本語の接続法には2つの時制しかない。それらは条件現在形と条件過去形である。／一般に、条件を表す小詞を伴うとき、条件現在形(～あば、～えば)は我がスペイン語の動詞活用では接続法不完了過去と未来に相当する。一方、条件過去形(～あら、～たならば)は、接続法完了過去と大過去に相当するのが常である。) (González 1954: 291. 和訳は本稿筆者)

ゴンサレスが挙げる接続法の例文は、以下のとおりである。

(18) a. Presente condicional (条件現在形): *Aruzenchin e iku to sureba, Supein-go wo*

22 Alfonso はスペインの出身だが、その文法書は専ら英語話者むけに編まれている。その独創的な記述は久野 (1973) をはじめ多くの研究者に影響を与え、日本語学が発展する礎となった。

23 近年では日本語学で「モダリティ」の概念が注目を集め、研究が進んでいる。ただし「モダリティ」と「叙法」は関連しているとは言え、同一の概念でないことは言うまでもない。例えば益岡 (2009)、福嶋 (2013-14) を参照。

naraimashō. (アルゼンチンへ行くとすれば、スペイン語を習いましょう。Si fuésemos (caso de ir) a la Argentina aprenderemos el español.)

- b. Pretérito condicional (条件過去形): *Mō ni-fun okuretaru kisha ni ma ni awanakatta no da*. (もう2分遅れたら汽車に間に合わなかったのだ。Si me hubiera retrasado solamente dos minutos, no hubiera llegado a tiempo a (montar en) el tren.) (González 1954: 291-292. 括弧内の和訳及び例文の和文表記は本稿筆者)

ゴンサレスが接続法と見なす形態は、「すれば」「遅れたら」のように、条件文条件節に現れる動詞形態と、それに伴う小詞である。即ち、ロドリゲス、コリヤード、オヤングレンが条件接続法、または条件法と名付けた語連鎖であり、もはやラテン語の *cum* と共起する時の用法の接続法を強いて日本語に求めようとはしていない。ゴンサレスは、さらに次のように述べる。

- (19) Si bien en rigor gramatical hay distinción entre estos dos tiempos del verbo japonés, prácticamente se usan indistintamente así en el lenguaje hablado como en el escrito. (厳密に文法的に見れば、日本語にこれら2つの時制の区別が存在するとは言え、話し言葉においても書き言葉においても、このようにこれらは実質上区別されることなく使われている。) (González 1954: 292. 和訳は本稿筆者)

ゴンサレスはラテン文法の枠組みで日本語を捉えようとはしていない。「接続法」という用語を用いるのは、スペイン語母語話者にとってなじみのある術語を使うことが、日本語の説明を容易にするという判断によるものである。

こうして、オヤングレンの日本文典から200年余りを経て出現したゴンサレスの日本語文法は、イベリア半島出身の宣教師による日本語研究の長い伝統を受け継ぐと同時に、終止符を打つことになった。

9. むすび

本稿で扱った文法書が日本語の何をもって「接続法」と見なしたかは、次の表のように要約できる。

(20)	文法書	接続法
	ロドリゲス (1604-08)	「～る」「～ば」(時)、「～ば」(条件)、 「～ども」(譲歩)、「～て」(願望)
	ロドリゲス (1620)	「～ば」(条件)、「～ども」(譲歩)
	コリャード (1632)	「～る」「～ば」(時)、「～ども」(譲歩)
	フアン・デ・ヘスス (17・18世紀)	「～る」「～ば」(時)、「～ども」(譲歩)
	オヤングレン (1738)	「～る」「～ば」(時)
	ゴンサレス (1954)	「～ば」「～たら」(条件)

初期には、宣教師たちはラテン文法の枠組みに則って日本語を記述しようとした。そのため、「とき」に先行する動詞形態をラテン語の *cum* に後続する動詞形態、即ち接続法に当たると考えた。また、願望文に用いられる動詞形態は、接続法ではなく希求法と見なした。しかしこの方法では、譲歩、願望、仮定など、架空の想念を表す動詞形態の大半が接続法から除外されてしまうことに気づき、接続法に準ずる叙法を設けたり、新たな叙法を立てたりして、この問題に対応した。こうして日本語文法記述は、西洋古典語の伝統から次第に離れ、日本語固有の実態に対応することを可能にした。しかし「接続法」という名称そのものはスペイン語母語話者にとって馴染み深く、理解しやすいので、指す内容を変えつつも20世紀に至るまで存続することとなった。

今日では、言語学理論に基づいて編まれた、スペイン語母語話者を対象とする日本語学習書は数多い。Okura 他 (1982)、Planas 他 (1984)、石原 (1985)、高木 (1996)、Aoki (1999)、Matsuura 他 (2000)、Association for Japanese-Language Teaching 編 (2000) などがその例である。また Montaner (2012) のように、スペイン語を母語とする研究者による日本語分析の専門書も出版されている。この中で、日本語に「接続法」という範疇を立てているものは皆無であるが、その学術的発展の下には、数世紀に及ぶ先駆者の努力、なかんずくイベリア半島出身の宣教師たちの試行錯誤の蓄積が潜んでいることを忘れてはなるまい。

接続法は黄金に喩えることができるかもしれない。周知のように、ヨーロッパの中世では、金は最も純粋な金属で、その他の全ての金属は何らかの方法で金に還元されるはずだとされた。錬金術師は他の金属から金を作り出そうと試みた。彼らはこの目的を達することに失敗したが、その試行過程が近代化学への道を拓いた。いわゆる南蛮人宣教師たちは、日本語の中に接続法を見出そうとし、それは達成できなかったが、その探究過程で日本語の文法体系のさまざまな様相を明らかにし、近代言語学を生む契機となった。彼らの残した著述は、

今なお日本語とロマンス語の対照研究に多くの示唆を与えてくれる。

参考文献

- Alfonso, Anthony (1966, 1980) *Japanese Language Patterns*. 東京：上智大学。
- Almáida Martínez, Rosa & Lucía Coco Decárolis. (2013) “Valores de ‘cum’”,
<http://profesoresdeclasicas.es> (最終閲覧2013年9月1日)
- Álvarez, Emanuel (1572) *De institutione grammatica*. Lisboa: Compañía de Jesús.
- Álvarez, Emanuel (1594) *De institutione grammatica*. 縮約・補訂版、天草：Colegio de Japón de la Compañía de Jesús.
- Aoki, Akira (1999) *Japonés para hispanoparlantes*. Toluca, Universidad Autónoma del Estado de México.
- Association for Japanese-Language Teaching (AJALT) 編 (2000) *Japonés dinámico. Edición española*, Madrid: Instituto de Japonología.
- Chamberlain, Basil Hall (1888) *A Handbook of Colloquial Japanese*. London: Trübner.
 東京：博文社。
- Chamberlain, Basil Hall. [1888, 1889²] 大久保恵子・訳 (1999) 『チェンバレン『日本語口語入門』第2版 翻訳 付索引』、東京：笠間書院。
- Cid Lucas, Fernando (2011) “Pedro de Burguillos y Diego Collado: trayectorias y logros de dos extremeños en el país del Sol Naciente”, F. Cid Lucas 編, *Japón y la Península Ibérica. Cinco siglos de encuentros* 所収, Gijón: Satori, pp.93-108.
- Collado, Diego (Didaco) (1632) *Ars grammaticae iaponicae lingvae*. Roma: Typis/impressis Sacra Congregatio de Propaganda Fide.
- Collado, Diego. [1632] 大塚高信・訳 (1934) 『コイヤード日本文典』、復刻版付、東京：坂口書店。
- Collado, Diego [1632] Spear, Richard L. 訳 (1975) *Grammar of the Japanese Language*, Lawrence: The University of Kansas.
- Cooper, Michael (1974) *Rodrigues the Interpreter. An Early Jesuit in Japan and China*, London: John Weatherhill.
- Cooper, Michael [1974] 松本たま・訳 (1991) 『通辞ロドリゲス』、東京：原書房。
- Curtius, Donker (1857) *Proeve Eener Japansche Spraakkunsts*. Leiden: A.W.Sythoff.
- 土井忠生 [1933] 「長崎版『日本大文典』と天草版『ラテン文典』」、『史学』12. 2、東京：三田史学会。土井忠生 (1982) 『吉利支丹論攷』所収、東京：三省堂、pp.90-141。
- 土井忠生 [1956] 「ロドリゲスの日本語動詞活用論」、『文学・語学』2、東京：全国大学国語国文学会。土井忠生 (1982) 『吉利支丹論攷』所収、東京：三

- 省堂、pp.142-166。
- 福嶋教隆 (2013) “¿Existe el subjuntivo en japonés?”, *Actas del congreso internacional sobre el español y la cultura hispánica en Japón*, 東京: Instituto Cervantes de Tokio, pp.222-239.
- 福嶋教隆 (2013-14) 「日西モダリティ対照研究史」、『神戸外大論叢』、63 (3), pp. 3-11, 64 (5), pp.3-17.
- 福嶋教隆 (2014) *El español y el japonés*. 神戸: 神戸市外国語大学 (研究叢書53) (Capítulo 3. “¿Existe el subjuntivo en japonés?”, pp.49-66)。
- González, Vicente (1954) *Gramática de la lengua japonesa*, 松山、自費出版。
- Hoffman, Johann Josepf (1868) *Japansche Spraakleer*, Leiden: E.J.Brill & W.Sythoff.
- Hoffman, Johann Josepf [1868] 三澤光博・訳 (1968) 『ホフマン日本語文典』、明治書院。
- 堀田英夫 (1996) 「ネブリハの『羅西辞典』とコリヤードの『羅西日辞典』」、『ロマンス語研究』29、pp.10-19、東京: 日本ロマンス語学会。
- Humboldt, Wilhelm von (1826) “Notice sur la *grammaire japonaise* du P.Oyanguren”, M.C.Landresse (1826) *Supplément à la grammaire japonaise du P.Rodriguez* 所収, Paris: Librairie Orientale de Dondey-Dupré Père et Fils, pp.1-12. / (1852) *Wilhelm von Humboldt's gesammelte Werle*, 7所収, Berlin: Verlag von Georg Reiner, pp.382-396.
- 石原忠佳 (1985) *Gramática moderna de la lengua japonesa*, Madrid: Edi-6.
- Juan de Jesús. (16・17世紀) *Arte de la lengua japona*. 未刊行稿本, Madrid: Archivo Franciscano Ibero-Oriental 蔵。
- 久野暲 (1973) *The Structure of the Japanese Language*. Cambridge, Massachusetts: The MIT Press.
- 益岡隆志 (2009) “Modality from a Japanese perspective”, Barbara Pizziconi & M. Kizu 編, *Japanese Modality. Exploring its Scope and Interpretation* 所収, New York: Palgrave Macmillan, pp.36-55.
- 松岡洸司 (1982) 「オヤングレンの日本文典の一側面 (1)」、『上智大学国文学論集』15, pp.53-77, 東京: 上智大学。
- Matsuura, Junichi & L. Porta Fuentes (2000) *Japonés para hispanohablantes*. Barcelona: Herder.
- 三好準之助 (2012) “João Tçuzu Rodrigues y su estudio del *keigo* japonés”, María Jesús Zamora Calvo 編, *Japón y España: acercamientos y desencuentros (siglos XVI y XVII)* 所収, Gijón: Satori, pp.139-152.
- Mondaner Montava, María Amparo (2012) *Caracterización lingüística de la lengua*

- japonesa para hablantes de español*, Valencia: Universitat de València.
- Nebrija, Antonio de (1492) *Gramática de la lengua castellana*, Salamanca.
- Nebrija, Antonio de [1492] Pascual Galindo Romeo & Luis Ortiz Muñoz 編 (1946) *Gramática castellana. Reproducción del incunable y apéndices* (復刻版)、Madrid: Junta del Centenario.
- Nebrija, Antonio de [1492] Quilis, Antonio 編 (1980) *Gramática de la lengua castellana*, Madrid: Editora Nacional.
- Nebrija, Antonio de [1492] 中岡省治・訳 (1996) 『カスティリャ語文法』、箕面：大阪外国語大学 (大阪外国語大学学術研究叢書14)。
- 野間一正 (1965) 「フアン・デ・ヘスースの日本語文典について」、*Hispánica* 10、pp.1-11、東京：日本イスパニヤ語学会。
- 小鹿原敏夫 (2009) 「『コリヤード日本文典スペイン語草稿本』について」、『國語國文』78 (12)、pp.1-18、京都：京都大学。
- 小鹿原敏夫 (2010) 「大文典の「条件的接続法」から小文典の「条件法」へ」、『國語國文』79 (9)、pp.1-16、京都：京都大学。
- 岡本信照 (2011) 「対照文法の先駆的著書—オヤングレンの『日本文典』(1738年)」、『スペイン現代史』20、pp.242-249、東京：スペイン現代史学会。
- Okura, Miwako, Ryuji Oki & Yoshie Awaiihara (1982) *Curso intensivo de japonés para hispanohalantes*, México, D.F.: El Colegio de México.
- Oyanguren de Santa Inés, Melchor (1738) *Arte de la lengua japona*, México: Joseph Bernardo de Hogal.
- Oyanguren de Santa Inés, Melchor [1738]. Makita, Tominaga 編 (1972) *Arte de la lengua japona* (復刻版)、天理：天理図書館。
- Oyanguren de Santa Inés, Melchor [1738] Zwartjes, Otto 編 (2009) *Arte de la lengua japona*, Madrid: Iberoamericana. Frankfurt am Main: Vervuert.
- Oyanguren, Melchor [1738] 岡本信照・訳 (2011a, b, 2012a, b, 2013a, b) 「オヤングレン著『日本文典』(1)～(6)、『研究論叢』76、pp.289-310、77、pp.161-179、78、pp.287-307、79、pp.305-326、80、pp.229-250、81、pp.245-260、京都：京都外国語大学。
- Planas, Ramiro & J.A.Ruescas (1984) *Japonés hablado*, Madrid: Omnivox.
- Real Academia Española (1973) *Esbozo de una nueva gramática de la lengua española*. Madrid: Espasa-Calpe.
- Rodriguez (Rodrigues), João (Ioão) (1604-08) *Arte da lingua de Iapam*, 長崎：Colegio de Japón de la Compañía de Jesús.
- Rodriguez, João [1604-08] 土井忠生・訳 (1955) 『ロドリゲス日本大文典』、東京：

三省堂。

Rodriguez, João [1604-08] 島正三・編 (1969)『ロドリゲス日本大文典』(復刻版)、文化書房博文社。

Rodriguez, João (1620) *Arte breve da lingoa iapona tirada da arte grande da mesma lingoa*, Manila: Colegio de la Madre de Dios de la Compañía de Jesús.

Rodriguez, João [1620] Landresse, M.C.訳 (1825) *Éléments de la grammaire japonaise* (縮約版仏訳)、Paris: Librairie Orientale de Dondey-Dupré Père et Fils.

Rodriguez, João [1620] 福島邦道・編 (1989)『ロドリゲス日本小文典』(復刻版)、笠間書院。

Rodriguez, João [1620] 池上岑夫・訳 (1993)『日本語小文典』、上・下、東京：岩波書店。

清水憲男 (2013) “Escritura española en la época cristiana de Japón. En el cuarto centenario de la primera embajada japonesa a España”. *El Español en el Mundo. Anuario 2013*. Madrid: Instituto Cervantes, pp.215-230.

杉本つとむ (1989)『西洋人の日本語発見』、創拓社。

高木香代子 (1996) *Manual de lengua japonesa*, Madrid: Universidad Autónoma de Madrid.